

清末期の外遊記録にみる西洋女性像

—— 張徳彝の記録を中心に ——

黄 太 華

はじめに

本論文では、清末外交官で、海外経験が多かった張徳彝（1847-1918）の残した外遊記録を新たな視点から考察するため、張が見た西洋の女性と中国の女性の観察を取り上げて分析する。

第二次アヘン戦争（アロー戦争、1856-1860）後、清朝政府は西洋諸国の要請に応じて各国に使節団を派遣して、国交を結んだ国々と交流を開始した。その結果、各国に駐在した外交官は大量の記録を書いた。これらの記録は「域外旅行記」または「出使日記」と呼ばれている。

1980年から1986年にかけて、中国の鐘叔河は、湖南人民出版社から『走向世界叢書』シリーズを出版した。これは、1840年から1911年の期間に通商や留学などの目的で欧米諸国や日本に渡航した中国人が残した貴重な文献を多数収録している。日記・筆記・遊記など、累計27冊以上の域外旅行記を収集・整理したものである。この叢書の出現は、中国史学界に貴重な研究資料を提供した。その後、日本の学者岡本隆司の『中国近代外交史の基礎的研究-19世紀後半期における出使日記の精査を中心として』（文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書）が2008年に刊行された。同報告書は、100種類以上の出使日記を整理紹介した。これらの研究によって近代清朝の駐在外交官が残した資料の重要性が注目されるようになった。その中で、外遊記録を最も多く執筆した外交官の一人が張徳彝である。本研究では、張徳彝の『航海述奇』シリーズを一次資料とし、先行研究であまり言及されていない女性観察に関する記述に注目して、清末期の外遊記録に見られる西洋女性像に対する考察を行う。

1. 先行研究と本研究の目的

最初に、本論文に関係する先行研究を3つのグループに分けてまとめておく。

第一に、『航海述奇』（『述奇』とも略され、各回の記録は渡航回数の数字を冠して『再述奇』

『三述奇』『五述奇』などと表記される)に関する研究である。

張德彝『航海述奇』に関する研究は、史料の整理とともに1980年代以降に登場した。鐘叔河の『走向世界：近代中国知識分子考察西方的歴史』(岳麓書社出版)は1985年に発表された。同書では、張の『航海述奇』の価値を紹介し、新しいものに対する彼の心理的な反応を、歴史学の視点から記述している。1988年には陳叔平が『巴黎公社与中国』(中国人民大学出版社)を上梓し、張德彝の『三述奇』におけるパリ・コミューンの記録を取り上げ、論評と再評価を行った。

歴史学以外の分野で、中国の学者は『航海述奇』の西洋のスポーツ、音楽、戯曲などを紹介している。李寧「意願・渴求・価値——從『再述奇』看張德彝对西方体育的介绍」(武漢体育学院学報、1988)は、中国の近代スポーツ史において、張德彝による西洋のスポーツゲームに関する認識が与えた影響を考察した。2009年に尹德翔の『東海西海之間——晚清使西日記中的文化觀察、認証与選択』(北京大学出版社)は、斌椿、志剛、郭嵩燾、劉錫鴻、張德彝、薛福成などの出使日記を例に考察した。同書の第六章では張德彝について論じている。尹は晚清使西日記における思想と文化、西洋音楽の価値を評価した。また、劉英曼が2014年に編集した「『航海述奇』所見張德彝与中西戯曲交流」(荷澤学院音楽系、戯劇文学)は、『航海述奇』の西洋演劇の描写を考察し、中国と西洋の演劇、戯曲の発展を比較研究した。劉は『航海述奇』シリーズが、近代中国における西洋演劇交流の在り方を示す貴重な資料だと評価した。

また、最新の研究として、2019年に発表された黄世俐の「張德彝『航海述奇』研究」(湖南大学修士論文)と薛曉涵「張德彝与『五述奇』中的使德故事」參花(上)、張曉川「罵槐実指桑——張德彝『航海述奇』系列中的土耳其」(新史学)がある。黄世俐は張德彝の『航海述奇』シリーズのなかから第一、第二、第八回目の記録を対象として、異なる時期の張德彝の創作手法の特徴を分析している。そして、古い時代の紀行文と比較して、張の創作の素材の相違点を考察している。薛曉涵は『五述奇』を中心に、張德彝が書き留めた現地の人の話の内容を分析して、ドイツと清朝の30年間の市街建築の変化を比較した。また、張曉川はトルコの政教風俗部分を中心に研究を展開している。

第二に、張德彝個人に関する研究である。

張個人に関する研究は、主に彼の西洋思想、外交貢献などの分野の変化を中心に考察しているものが多い。例えば、2008年の樓秀麗「張德彝：一個清朝外交官西方認識的成長史」(華東師範大学修士論文)、2014年の耿明「張德彝思想研究——基于八部『述奇』的考察」(安徽師範大学修士論文)がある。また、陳梁芊が編集した「張德彝与晚清外交」(蘇州科技大学、2016)と「張德彝与晚清外交改革」(蘇州科技大学学報(社会科学版)、2018年02期)などがある。また、張に関する翻訳習慣についての英文研究も現れている。例えば、2022年には連正「清末外事訳員慣習研究——以張德彝为例」(北京外国語大学修士論文)が発表された。

第三に、張德彝記録中の女性に関する研究である。これは近年でも数編しかない。

2018年の董佳貝「霓裳 才媛 階層—晚清出使日記中の西方女性（1866－1895）」（安徽大学学报（哲学社会科学版））は、19世紀後半（晚清早期）の使節外交官の記録を主な研究対象として、張にも言及している。ただし、主な対象は郭嵩燾、曾紀沢などの身分の高い在外公使の記録であり、当時身分が低かった張德彝に対しては十分な分析を行っていない。2019年の頼某深「賽金花、避孕套及其他—張德彝『五述奇』談趣」（書屋）では、主に張德彝『五述奇』のコンドームと避妊に関する記述、および地方の風俗を中心に論じている。女性に関する記述については、当時の駐在公使であった洪均の夫人（賽金花）のドイツでの生活、宴会での交流などを簡単に述べている。最後に、2021年に劉超、梁程宏らが編集した「近代士人对西方世界的觀感探微—以清人張德彝八部『航海述奇』的女性觀察為視點」（寧波大学学报、人文科学版）を挙げる。同論文では、張德彝と使節団メンバーの記録を比較し、女性の記録についての研究を展開している。しかし、女性部分に対する研究はまだ不十分で、とくに文中で言及されている中国と西洋の女性の教育比較については、より深い探求が必要である。纏足のような中国の習俗に対しても十分な歴史的考察が行われておらず、誤りも存在している。そこで、本論文では、八回の航海外遊の過程で張德彝の西洋女性に対する考察がどのように変化していったかを見ていく。具体的な流れとしては、西洋女性の風習、西洋女学・女子教育、中国と西洋における女性の自主意識—纏足・足の整形など、歴史的背景の補足と中国・西洋女性の差異の再検討から張德彝の女性観を研究し、張における清末時期の西洋女性像を明らかにする。

2. 西洋女性の風習

1858年の天津条約によって清朝末期の中国は開国することになった。その結果、西洋の事物が中国に大量に流入した。西洋文明は中国人にかつてない衝撃を与えた。清朝末期、西洋人女性の中国への進出はまだ少なかった。女性宣教師や中国にやってきた外交官の家族がいたとしても、中国人が西洋人女性と間近で接する機会は極めて少なかった。中国人が西洋女性に接する機会は、海外に出使した官員、留学生に限られたとってよい。突然西洋の世界に入った彼らは、さまざまな衝撃に直面した。張もその一人だった。西洋の女性を見る機会が最も多かったのは駐在大使などの役人であろう。彼らは仕事の関係で、さまざまな身分・階層の西洋人女性と接触した。女王、宮廷の女性、裕福な中産層の女性、サラリーマンの女性などである。

2. 1 西洋女性の倫理道徳

張德彝の西洋女性の倫理道徳に対する認識を、以下、3つの方面から考察していく。

第一は、女性の装いについてである。1866年、張德彝は清政府による最初の外国視察団（斌椿使節団）のメンバーとして、初めてイギリスやロシアを訪れた。張德彝は、山川や気候などの自然環境のほか、外遊の途中で諸国の女性の服装を記録していた。まず訪れたサイゴン（ベ

トナムのホーチミン市)の女性はズボンを着用せず、赤い布だけで下半身を包んでいた。シンガポールに着いて、張徳彝は、「男女とも裸で、腰に紅白の布を巻き、布の一端を肩に掛けている(男女皆赤身跣足, 腰圍紅白洋布一幅, 一頭搭于肩上)」いるのを見た(張徳彝, 2016a, p. 22)。その様子は中国では極めて珍しいものだと驚いた。セイロン(スリランカ)の女性は前者とは異なり、「男は裸で、腰に赤い布のロングスカートを巻いている。女性にもズボンがなく、白い汗衫を着て、下にもロングスカートををはいている(男子赤身, 腰圍紅布長裙。女子亦无裨褲, 着小白汗衫, 下亦長裙)」(同上, p. 25)と言った。また、エジプト人女性について、張は彼女たちが僧に似ていると評した。何枚も重ねた衣を羽織り、頭に青い布を巻いているからだ。使節団のリーダーだった斌椿はパリにて、地元の役人に招待された際、出席した各官僚夫人は「長い裾の派手な服を着て、眩しいジュエリーを身につけて、すべて腕と肩から胸までを露出している(無不長裾華服, 珠寶耀目, 皆袒臂及胸)」(斌椿, 2016, p. 20)と述べている。数日後、英国に到着して王子に謁見した時にも、また「婦人は赤や緑などさまざまな色の服を着て、肩や腕から胸までをあらわにする(婦人衣紅綠雜色, 袒肩臂及胸)」(同上, p. 26)というような光景を見た。当時60代の斌椿と成人したばかりの19歳の張徳彝にとって、その姿は見るに耐えないものであった。中国人女性は一貫して控え目であり、笑うときには歯を見せない。『礼記』には、「女性は外出する時、必ずその顔を隠さなければならない(女子出門, 必擁蔽其面)」(阮元, 1980, p. 1462)と書かれている。儒教思想を受け入れた中国人女性は思想であれ、行為であれ、外見であれ、外にさらけ出してはいけないのである。それに対して西洋人女性のドレスは開放的であった。中国の視察団に与えた心理的衝撃がどれほど強かったか容易に想像できる。

若い張徳彝は西洋人女性のこのような姿を批判した。『再述奇一歐美環游記』の中で、張徳彝は、これらの西洋人女性は「こめかみの毛は素晴らしく、ドレスはシックで、通行人の期待に添うようゆっくりと街を歩いているが、これはあまりにも人を誘惑しすぎだ(若鬢髮超群, 裙衫別致, 必緩歩街游, 以供途人顧盼, 斯亦誨淫之甚者矣)」(張, 1981, p. 195)と低い評価をした。西洋女性の開放的で自由で「放蕩」な生き方、ファッションを求めて過度な消費をしている贅沢で浪費癖のある生き方は、張には受け入れがたいものだった。明・清時代の女性に対する教育思想『女誡』は「好ましくない女性は、装いがきわめて華美であり、賢女に及ばない(不良之婦, 穿金戴銀, 不如賢女)」(張福清, 1996, p. 87)としている。服飾の儉約も女性の品行を分ける重要な基準である。特に中国のような「男尊女卑」の考え方がなく、社会で女性が尊重されている西洋の気風は、初めて西洋に来た張徳彝に大きなギャップを感じさせた。

第二は、戦争中の西洋女性の活動についてである。1870年、張徳彝は第三回目の外遊に出かけ、普法戦争を目撃した。そこで彼は、フランスの戦場に女性の英雄がいるのを見た。このことは張徳彝の伝統的な性別観に大きな衝撃を与えた。この外遊で彼の女性の「三従四徳」や「男は外、女は内を守らなければならない」という婦徳観念は打ち破られたのである。前の二

回の旅行期間に見られた西洋人女性の開放、気風に対する低い評価も修正された。張德彝は、フランス人女性が戦場で発揮した役割について、以下のように述べている。

男性はみな兵士であり、女性は火薬を作る人、土城や砲台を築き上げるために縫い袋に砂や石を詰める人、軍事情報を文字で伝えることができる人であって、武器を担いだ女性が男性よりも何倍も勇猛であることに驚いた（男皆当兵，女則有造火葯者，有縫布袋裝沙石以筑土城与炮台者，有能文工書草露布者，竟有荷戈而驍勇倍于男者，奇甚）。（張，1982，p.166）

今では数百人の女性兵士を捕らえ、放火や逮捕への抵抗のすべては彼らの策略によるものだという情報を自白している（現擒女兵数百，訊明供認，一切放火拒捕，多出若輩之謀）。

（同上，p.172）

普仏戦争の勇敢な女性は張德彝を大いに震撼させた。その後、張は「西俗で女は男より重要・重視される。女性はタバコを吸わないので、女性が同席している限り、男性はタバコを吸わず、敬意を示す（西俗女重于男。因女不吸烟，故凡遇婦女在座，男子不吸，以昭敬重）」（同上，p.157）と記録した。また、女性には自由に街へ遊びに行く権利があり、一人で旅行する自由があった。張の西洋女性に対する生活、家庭についての考察と記録は以後明らかに増えた。

第三は、婚姻の自由についてである。斌椿使節団に随行した英国人秘書の包臘（英国名：Bowra, E. C. M.）が結婚式を挙げた。この結婚式を通じて、張德彝は西洋の結婚は中国とは異なり、両親が主導し、仲人が紹介した規則を守る必要がないことを観察した。「男女の結婚は、すべて自主的」である。男女の交際も禁止されることではない。双方は未婚の時、互いに慕い合い、友人のような付き合いをしている。結婚において双方の地位はさらに平等であり、「男は側室と結婚してはならず、女は二人の夫と結婚してはならず、男には三妻四妾の権利がない。このような平等にも前提があり、双方の1年間の所得、互いに同等の経済力を基礎に構築されたものである」（男不許娶二室，女不許嫁二夫，男方無權三妻四妾，此種平等有其經濟支撐，再計其一年所得財帛，比之相等）（張，2016a，pp.116-117）と記述した。これはまた中国と西洋の社会的風習の異なる面である。そして、『五述奇』では、30歳の女性が新聞に結婚相手を募る広告を出して、名望のある、同じ財力の男性を探していることが記述されていた。このようなことは同時期の中国人女性にはまだ不可能だった。『六述奇』では、英国では、自主的に離婚して復縁できることも記録している。

英国の一般の男女は結婚しても、媒酌の話はなく、自分で仲人をしている。嫁に行った後、夫に不倫や家財浪費などがあったため、妻は訴えて離婚した。このような事件は裁判所の審理を経て、定例によると6ヶ月後、男は再婚することができ、女も再婚することができる。したがって離婚して間もなく、役所に復縁を通告することもしばしばあった（英俗男女結婚，皆無媒妁之言，而自作執柯，乃往往婚媾以後，或因夫有外務及奢費家財等事，經妻告官而斷離異者。此等控案經

官断離，按定例六個月後方准男再娶女再嫁，故亦屢有離後不久，…，依然自成夫婦，而告官銷案者）。
 （張，2016c, p.475）

その後も男女交際についての観察は続けられた。『八述奇』によれば、張徳彝は「男女の交際はヨーロッパで広く受け入れられており、不思議なことではない（男女倫交，西国通俗，無足怪也）」（張，2016d, p.84）と認識している。八回の外遊の後、多くの国の人民の風俗・習慣を閲覧した張は、西洋に徐々に溶け込み、西洋女性の多様性、自主的な結婚の決定、男女平等の平常化を受け入れ始めた。しかし、中国と西洋で異なる出産観念や、スカートをはいて自転車に乗る女性の姿などは、風教を害すると捉えられ、まだまだ理解できないこともあった。

2. 2 両性関係

中国の伝統的な観念では、「性」について語るものが忌避されてきた。女性にはとくに「貞潔」の道德要求が非常に厳しく求められている。女性は自分の心身の欲望を厳格にコントロールし、抑圧しなければならない。儒教の經典の一つである『礼記』には、男女の別は家庭内の秩序や社会の秩序を保つために不可欠のものであると書かれている。男女平等の観念は儒教倫理観念の中では最も禁忌とされている。

張徳彝の記録の中には、貴族階級や官僚夫人以外に、売春婦に対する描写が少なくない。例えば、フランスでは、「フランスの都の売春宿は、空の星のように散らばっている。遊妓は人を誘惑し、日々人の注目を集めている。同町には4万数千人の売春婦がいるそうだ。（法京妓館，处处棋布星羅。而游妓勾人，日日招蜂引蝶。聞同城以四万数千計）」（張，1981, p.149）と記録した。その後三、四回目の外遊でも、フランスやドイツなど西側諸国の売春婦の数の凄まじさに感嘆することが多かった。その後、第五回目の西行では男女避妊用具やドイツの売春婦が公娼と私娼に分かれていることに言及した。実際、外遊期間中、張は西洋の女性が男性との関係に情熱を持っていることに対して、ずっと気にかけていた。キスや握手などに対し、彼はずっと『孟子』に現れる「男女授受不親」、すなわち男女は物を受け渡すときにも親しく手渡しはしないのが礼であるという観念を堅持していた。そのため批判的な視点で社会の底辺にいる売春婦の群れをみていた。

第六回目の西洋行を経験した張徳彝は、50歳で天命を知る年になっていた。この頃には張も経験が豊富となり、理念も成熟していた。複雑な外交事務、頻繁な交流の中で、張徳彝は西洋文化に浸るうちに、女性の役割や両性関係に対する認識を知らず知らずのうちに変えていた。このような変化は特に張徳彝の男女に対する態度、親密な関係に対する理解に表れている。『六述奇』から、張徳彝の西洋女性に対する叙述は大きく変化し、西洋の両性関係に対する不適応から、西洋の両性関係に対する理解と受け入れに至る。

西洋絵画の中にみる男女関係について、以下のように描写している。

睦み合う人やキスをする人が多いのを見たが、街の往来には男女がじゃれあっている人もいなかったし、見るに下品な人もいなかった。その原因を追求したところ、西洋人男女は愛を旨とし、不当な男女関係を恥とするのが彼らの風習であることを知る（多調情接吻者，然于街市往来，不見有男女嬉笑，放言狎褻，令人觀之不雅者。推原其故，乃知西人之于男女，以愛悅為宗，而以苟且為恥，其俗使之然也）。

（張，2016c，pp.285-286）

張德彝は徐々に西洋文化の環境下での両性の付き合いを理解することができるようになった。男女間の親密な関係はかりそめではなく、彼らの愛の表現だと理解することができるようになった。彼は西洋の役人が開催したダンスパーティーに参加した時、西洋のダンスの動作は男女が腰を抱いて肩を撫で、一緒に協力する必要があることを聞いた。張は、親密すぎるように見えるのは見苦しいが、感情表現の必要性だと理解した。

第八回目の外遊記録で、張德彝は、「西国の男女、最も情愛を重んじる（西国男女，最重情愛）」（張，2016d，p.526）と強調したのである。張は両性関係を男女間の親密な活動と見なすべきであり、礼法の束縛ではなく、慈しみ愛し合う心から出ているものだと認識した。

3. 西洋女学・女子教育

西洋文明を考察する際に、張德彝がまず注目したのは、西洋女性の外見上の装いだだった。それは若い張德彝に衝撃を与えるものだった。しかし、外交事務に参加し、欧米人女性との宮廷での謁見、宴会、舞踏会、プライベート訪問などの場で複数回、西洋女性と出会うことを通じて、張は、西洋女性の洗練されたメイク、華やかな服装以外の内面世界に気づき始めた。外遊記録には、西洋教育、特に女子教育問題に対する張德彝の関心が表れている。

張德彝は海外を訪問し、地方の風俗を視察した時、西洋に伝わる言葉を聞いた。それは「西洋諸国には言語が数種類あり、凡そ君主、文武大臣、庶民の男女は、3、4カ国の言語を上手に話すことができる（泰西各国，語言數種，凡国君文武及庶民男婦，皆以善談三四个語言為能）」（張，1997，p.564）というものだった。最初、張德彝はそれらを迷信と捉え、人を騙すものだと考えた。しかし、長年の遊歴と観察を経て、張德彝は自らの経験から迷信に見えた事柄の妥当性を一つ一つ検証していった。張は、スウェーデンで王族女性の「王妃や王女が英語とフランス語を話せること（王后与公主皆能英法語）」（張，2016a，p.89）を発見しただけでなく、フランスでは、「アメリカのボストン出身のガウエンという人がいる。3人の娘と1人の息子を育てており、それぞれの子供が4、5カ国語に精通している（有高恩者，…合衆国包斯頓人也…生有三女一子，…各人皆通四五个語言）」（張，1981，pp.176-177）のも見た。西洋の教育が平等に普及しているのを実見し、張は自国の実情を考慮した上で、西洋の近代女性教育を参考にすることを提唱したのである。

3. 1 西洋の義務教育

1876年に張徳彝が郭高燾とともにイギリスに出使した際に、彼は『随使英俄記』の中でイギリスの教育状況を紹介した。そこでは「西洋の子供は、男女を問わず、凡そ8歳で学校に通学しない場合、慣例に従って罪を定め処罰することになっている。だから西洋の男女は貧富にかかわらず、文字を知らない人はいない（西国兒童，不拘男女，凡八歳不送入学，議罰有例。故男女無論貧富，無不知書識字）」（張，1986，p.202）とされた。また、「子供を産むには皆役所に報告しなければならない。田舎の役人は戸籍を調べ、5歳になると塾に入るように命じたので、英国の男女には字を知らない者はいない…これらの車夫職人でも仕事の休憩ごとにニュースを見て見聞を広めない者はほとんどいない（凡生子女皆報官。郷官歳核戸冊，已届五歳者即令入塾，故英国男女無一不識字者，雖車夫匠役，每于工作暇時，鮮有不閱新聞紙而広見聞者）」（同上，pp.539-540）と述べた。中国の教育が少数に限られているのとは異なり、明らかに西洋での教育が普及していることを示している。現在の西洋では、誰でも知識を持っており、字を知らない人はほとんどいない。張は、イギリスだけでなく、義務教育制度の実施はヨーロッパ諸国で一般的な現象であることを発見した。例えば、ドイツの教育制度は、次のように説明されている。

貧富にかかわらず、子供は、満六、七歳になると、皆入学しなければならないと規定されており、律例に従わない者がいれば、親の責任が追究される。また特別に夜学を設置し、学院に入らない者は、夕方の暇な時間に、算術や画学などの芸能を学び、学力を向上させた（無論貧富之子女，至六七歳，皆須入学，如有抗例不遵者，則要追究其父母の責任。“又特設夜学，使其未入学院者，于薄暮暇時，入内以学算学，画学各芸，使其学有長進）。（張徳彝，2016b，pp.91-92）

また、ロシアの学者は他国に劣るが、「ここ十数年は進歩が見られ、100人に12人が本の読める者であった（近十数年頗見長進，每百名竟得十一二名能読書者）」（張，1982，p.250）とも記述された。そして、フィンランドは「誰もが本を読むことができるわけではないが、字を知らない人は一人もいない（芬蘭雖非人人能読書，而不識字者無一人。）」（張，1986，p.778）ことに言及している。明らかに、張徳彝が西側諸国の義務教育の取り組みを賞賛していることがわかる。

義務教育は西洋近代教育の重要な構成部分である。アヘン戦争後、清朝は西洋の義務教育に関心を持ち始めた。例えば、清朝末期の著名な学者である馮桂芬は『校邠廬抗議』において、いわゆる「中体西用論」、中国の儒教を本体として西洋の軍事技術や学術を部分的に導入していく方向を提案した。また、鄭観応も西洋の義務教育について論じている。しかし、彼らの議論は中国の外に出ておらず、実地調査を経っていないものであったことから、認識の偏りは避けられない。これに対し、張徳彝の西洋における義務教育の認識は、実地調査に基づいて構築されたものであったので、断片的ではなく、より深く具体的に包括的に認識されたものであった。

以上のことから、張德彝は義務教育が国民男女の教養を高める役割に注目し、中国でも義務教育を実行する重要性を深く認識していたと言える。

3. 2 女子教育

中国において、伝統的な女子教育は家庭での教育を基本とし、良妻賢母の育成を最終目標としてきた。『烈女伝』、『女訓』、『女誡』などはいずれも女性の必読書であり、「三従四徳」の教えは女子の言動の道德規範とされてきた。しかし、西洋列強の侵入と開国を経て、中国に西洋の価値観が入ってくるようになると、伝統的な女子教育のあり方は動揺した。とくに中国に進出した西洋の宣教師たちが、教会で従来とは異なる女子教育を率先して行っていった。これにより、「男女平等」の観念は徐々に浸透していった。

しかし、男女の役割を分ける別の文化観念が浸透している中国では、教会における初期の女子教育の実践は長い間人々に注目されてこなかった。19世紀の60、70年代になると、清朝末期の知識人が国外に出る機会が増えたことで、西洋の発達した女子教育の状況が注目された。清末の改革思想家である王韜は、1867-1869年に英仏を遊歴した時、英国人が「女子は男子と同じで、小さい頃から読書を学び、書画、暦学と算術、地理、地図、山のこと、海のことなど、ありとあらゆることを深く研究し、その精髓を身につけた（女子与男子同，幼而習誦，凡書画，曆算，象緯，輿図，山經，海志，靡不切究窮研，得其精理）」（王韜，1985，p. 107）ことに気づいた。

張德彝は自身の实地観察を通じて、西洋諸国が女子教育を重視しており、女子と男子は同等の教育権を持っていることを理解した。また、「西洋の女性はまず本を読み、それから天文や算術などを学び、針仕事（古代中国女性の必修科目）など一切は省略されて教えない（盖洋女先讀書，後習天文算学，針黹女紅一切略而不講）」（張，2016a，p. 67）と記している。このことは、中国の伝統的な女性教育とは大きな違いがある。張は何度も外国に行くことによって、西洋の女子教育についても深い理解を持つようになった。帰国後の1888年12月8日に彼は『五述奇』の中で次のように記録した。

外国の女性は、貧富に関わらず、すべて7、8歳で入学して本を読まなければならない点は、男と同じである。清朝の故官には幼女学が設置されており、女学は男学と同じ規模で、その勉強の内容も男子とは少し異なっているが、その初学でも、すべて読み書き、絵、算数、史記、律例、地理などを学んでいる（外国女子，無論貧富，皆須于七八歳入学讀書，与男子同。故官中設有幼女学，女学与男学規模一律，其所学与男子稍異，然其初学，亦皆讀書写字，学画学算術，史記、律例、地理等学）。（張，2016b，p. 206）

張德彝は、彼なりに西洋諸国の女性の学問が発達している理由を分析した。それは「西洋の時勢から見て、女性は学がなくては生活することができない。しかし、紡績針糸の各職種は、

機械のコストが人より低く、効率が良いため、皆機械に置き換えられた。これは女性労働者がすべて見捨てられることにもつながり、貧しい女性が増えている。そのため、店には女性の店主、女性の店員がいることが多い。これらの女性は教習をして、職人をして、そして書写を学んで、翻訳者として…（以泰西時勢觀之，婦女無学，無以度日，盖現在織紡縫繡各工，皆改用機器，以其価廉而工者，則女工尽棄。女工尽棄，則貧婦愈多，因而凡店局鋪肆，多系婦女督理掌櫃，作秋計，作堂宮，作教習，作工役，更有作抄写，備翻譯者…）」（同上，p. 206）と多くの理由を挙げている。この現象は、当時の産業と貿易の発展に女性の生存が急務だったことを示している。

西洋諸国の経済貿易の発展は、女性に勉強を強要し、学ばせなければ生計を立てることができないと張徳彝は考えた。張徳彝は男女平等が人類文明の発展の趨勢であるとまでは考えなかったが、人々の観念が新たになるにつれて、女子は男子と同じ教育を受ける権利があると認識するようになった。これは時代の発展の必然である。彼はすでに西洋の女子教育がその社会生活の中で果たす重要な役割を認識できるようになっていた。

4. 中国と西洋における女性の自主意識——纏足・足の整形

最初は反発していたものの、以上のように西洋女性像の在り方（教育を受けた女性が社会で果たす役割の重要性など）を肯定的に認識するようになった張は、同時代の中国の女性がおかれた立場を改めて考えることになった。そこで、中国女性が活躍するための障害となっていると張が考えたのが纏足だった。

纏足は中国古代の悪習である。多くの女性は自主意識（独立意識と自己認識）を発展させる年齢よりも早く、一般的な女性は4、5歳から足を巻き始め、成人の骨格が固定した後に布の帯を解く。なかには一生巻きつける人もいる。それを施すのは母親など家族のなかで目上の女性であることが多い。女性は纏足の伝統と規範を独立意識のない幼女の頃に植え付けられる。成長する過程で纏足に対する認識を絶えず強化していくが、社会全体の纏足に対する推賞は、女性を纏足の付属品とする考え方も生み出した。学者の高洪興が1995年に出版した『纏足史』の考証によると、纏足は北宋後期に始まり、南宋で発展したとされ、元代にも継承された。そして、明清時代に纏足が最盛期に入ったと述べられている。纏足の風俗が社会の各階層に広がっている時代に、女性は、貧富の貴賤を問わず、次々と纏足していたが、纏足していない人も少なくなかった。纏足について、学者の黄紅萍は、ただ単に女性の足のこととしてだけでなく、古代の人々が約一千年の間苦勞してきた問題だと述べている（黄紅萍，1997，p. 25）。

女性は纏足することによって、自主意識（選択の自由、行動の自由）が搾取された。また、社会的活動が阻まれ、家庭内における発言権をも略奪される。出かけるのが不便になるため、女性は家庭内に軟禁される傾向が一層助長されていった。

4. 1 纏足反対運動

纏足の陋習に終止符を打つべく、社会的な反対運動が始まったのは、19世紀も後半になってからのことだった。1870年代に、纏足反対運動が中国で密かに広まり、西洋から来た宣教師が中国の教会に女子の学校を設置した。さらに、啓蒙団体として「不纏足会」を設立することで纏足禁止の宣伝を始めた。1874年、英国人宣教師ジョン・マイケル・ゴッドウィン（約翰・麥克高望）は、纏足を廃止する「天足運動」の発起人であり、指導者だった。宣教師が主導して西洋の宗教観念と文化を持つ組織を構築したため、これは中国人にとって、西洋を知る良い前提となった。ジョンは率先してアモイに60人以上の女性を擁する「天足会」を設立し、入会した女性は纏足がほどかれた。また、学者の夏曉虹によれば、1875年の雑誌『万国公報』は「保師母与年会議論纏足信」を転載し、信者と宣教師が書いた反纏足文章が続々と発表された（夏曉虹, 1995, pp. 219-229）。これらの活動はやがて中国の女性解放思想に結びついていくことになる。

初期女性解放運動につながる言説を提起したのは康有為、梁啓超ら維新派の指導者たちである。関西中国女性史研究会の研究によれば、康有為は、1883年に友人らに不裹足会の創設を呼びかけたとされる（関西中国女性史研究会, 2015, p. 66）。維新の変法期間中、上海で「梁啓超が「変法通議」のひとつとして発表した「女学を論ず」（『時務報』）は19世紀末女性界に多大な影響をもたらし、中国人が運営する初の女学校——中国女学堂の創設へとつながっていった」（同上, p. 62）と評価した。1898年に康有為は「請禁婦女裹足折」で女性纏足のような「非法な酷刑を禁止することが急務である（亟宜禁此非刑）」（高洪興, 1995, p. 162）と光緒皇帝に奏請した。光緒帝は康有為の意見に同意し、纏足の禁止を推進させた。

当時、張德彝は海外にいたが、中国国内で盛んに議論されていた纏足反対の機運は海外の中国人にも伝わった。1901年から1905年は中国近代史における纏足運動のピークである。1905年、中国同盟会が設立され、孫中山が指導する革命派は「三民主義」の旗を掲げ、清朝の立憲君主派と政治闘争を行いながら、清政府の専制統治を覆すために武装蜂起を起こした。この時期に、婦女運動も発展し、纏足反対運動は女性解放運動の一部として、引き続き提唱され発展した。1911年の辛亥革命後も、纏足の風習は絶えなかったが、社会問題として取り上げられ、纏足の根絶のための数十年にわたる粘り強い運動が展開された。纏足は、中華人民共和国成立後に解決された。

4. 2 張德彝と纏足

張德彝が初めて女子纏足問題について触れたのは、いつ頃のことなのか。劉超・梁程宏らによれば、1889年7月21日に『五述奇』で「張德彝は宣鼎の『夜雨秋灯録』小説の「大脚仙殺賊三塊」の章を読んで、その後、懊農氏は世の中で一番惨めなことは、女子が纏足するということだ（人間最惨、莫如女子纏足）（劉超ら, 2021, p. 33）と評価した。その後、張德彝は自分

の思考を陳述した」という説明をしている。しかし、筆者は『航海述奇』シリーズ本を読み、張が初めて纏足に言及したのは、それよりも10年早く、第四回目の西行の『随使英俄記』（四述奇）1880年1月5日の記録の中であることを発見した。

外国人女性はみな腰の細さを重要視しており、幼いにもかかわらず腰を縛ることを提案しているが、飲食の量は減らないので、体を損なうことはない…中華女性は裹足することが多く、小さくさせて、皆幼い頃から巻きつけているが、成長してから包む人はほとんどいない。私（張德彝）の見たところ、腰を縛ることと、裹足することは、わざとらしいと感じる（按外国婦女皆重織腰，幼雖約以範圍，而飲食不減，故于身命無傷…中華婦女多裹足，使之纖小，亦皆自幼圍纏，鮮有長成而后裹者。以彝觀之，束腰裹足二事，未免近于矯揉也。）。
（張，1986，p.774）

二度目に女子纏足問題について議論したのは、『五述奇』の中で、1888年の西洋人との会話のなかに登場する。この西洋人は「華人の足は皆小さくて大きくないと言っている（洋人謂華人之足皆小而不大）」（張，2016b，p.217）が、張德彝は、西洋人が、纏足の風習を知らずにこうしたことを言うのを嘆いている。西洋人は中国人女性が母親から足を巻かれているために、足が大きいことを知らないのである（同上，p.217）。これは当時の西洋人の中国に対する認識不足を反映していると考えた。

三度目は上述の1889年7月21日の記述である。張德彝は小説を読んだ後、翌日に西洋人女性の経験を用いて評論を加え、西洋にも女性の健康を損なう悪習（足の整形）があることを述べた。そして、「フランスにはもともと女性が足を切って足を細くする風習があり、ドイツ人もそれに倣っている（法国有婦女割脚使細之俗，徳人亦仿效之）」（同上，pp.310-311）と述べた。ドイツと中国の違いは、「十数年前、ビスマルクから諭令が出され、ドイツはこの風習を禁止したので、今のドイツにはない。「体が大きくて足が小さいか、体が小さくて足が大きいかは、みな見苦しい。世界の万物には定説があり、大きさを均一にしなければならない（身大脚小，或身小脚大，皆不雅觀，是造物生人有定，必使大小均勻也）」（同上，p.311）ということである。この時、張德彝は纏足すること、足の整形（足を切ること）などの風習が自然の法則に反していることに気づき始めたのである。

四度目は1890年6月25日のことだ。張德彝は同年5月23日に出版の『滬報』の「論女子裹足母実不慈」と題する記事を読んだ。新聞では、纏足について母の慈悲と長い間培ってきた習慣が踏襲され、破壊できないほど頑丈だったことを記載していた。これに対し張德彝は「天下万国〔中華を内包する全世界－引用者注〕にはこのような卑しい風俗はない（天下万国無此陋俗）」（同上，pp.459-461）と主張している。

五度目は1897年10月30日である。張德彝は同年9月15日に発行の『時務報』38冊に「戒纏足会章程叙」という文章を抄録した。その中の論点は悪習を除くことを強調するものだった。無論張德彝は賛成である。文章の中で、洋務派の張之洞は纏足の女性が立ち上がりにくく、生産

にも不利な弊害があることを説明した。それに伴って、張之洞は戒纏足と、喫煙の2つの害を取り除くべきだと主張した。張徳彝は、中国各地で設立される纏足会に希望を寄せ、人々の力を集め、「期待できる結果を、目を見開いてよく見ながら待ち構えているべきだ（成效可期，当拭目俟之）」（張，2016c，pp.155-158）と考えていた。

六度目は1897年12月14日である。張徳彝は同年8月9日の『時務報』第35冊で「中国纏足一病，実阻自强之機，并肇将来不測之禍説」（同上，pp.184-185）という記事を見つけて読んだ。同文章の著者は、女性纏足に対して賞罰のルールを作り、西洋の天足会が中国人よりも纏足しないことに関心を持っていることを嘆いた。張は著者とは逆に、新聞や雑誌の議論文を何度も読んで、纏足という悪俗を改めることに希望があるかもしれないと考えた。劉超らの研究では、『述奇』の検証において、彼らが五度目と六度目の記録を間違えて記述している（劉超ら，2021，p.33）。

最後に、1905年8月21日の記述である。張徳彝は歴史を振り返り、1664年に康熙帝が纏足禁止を命じ、刑部に監督されたことがあった（張，2016d，pp.678-679）と述べた。しかし、それには200年来少数の人々が従ってきただけで、民間にもいくつかの戒纏足会が設立されたが、西洋人が天足会を設立した後、ようやく人々はそれを受け入れた。西洋に先導されてしまうのは本当に恥ずかしいと考えた。

以上の7点の記録の中で、張徳彝は女性纏足に対しては常に洋務派、維新派人士動員の纏足解放運動に支持を表明し、成果を期待していた。しかし、主導者が宣教師などの西洋人になった時には、張は儒家思想（華夷思想）の教化のため、依然として清朝支配階級を擁護する立場に立った。彼は清政府の不作為を認識しているにもかかわらず、西洋人主導の纏足反対運動には批判的だった。これは張徳彝の思想上の限界でもある。

おわりに

第二次アヘン戦争敗北後、清朝使節団の西洋訪問、外交人員の大量の記録と考察に伴い、清政府も徐々に西洋文明の急速な発展を認識し、中国国内の洋務派の張之洞や、維新派の康有為、梁啓超らの人々も改革の歩みを加速させていった。伝統的な儒家観念は徐々に瓦解し、女性に対する認識、両性関係に対する考え方も外遊経験に影響されて変化した。本研究は、張徳彝が残した8部の『航海述奇』から西洋の女性像を考察し、中国女性を取り囲む状況に起こった変化を検討した。本文は、先行研究の資料を整理分析した上で補足を試みた。

張徳彝の西洋女性像を振り返ると、以下のようにまとめられる。まず、1866年から最初の第一、二回西洋外遊期間で、張徳彝は中国と西洋の女性の服装の違い、西洋の女性の開放、浪費等の特質に衝撃を受け、無意識に儒教の伝統的な道徳基準で西洋の女性を評価し、批判的に否定的な態度を示した。

次に、第三回の出使期間（1870年）では、普仏戦争で活躍した勇敢な女性に感銘を受け、既存の「男尊女卑」観念に対する反省に陥るとともに、女性の力を尊重し始めた。

そして、第四回外遊（1876年）から、張徳彝は西洋女性の教育を注目し、女子纏足について自らの意見を主張し始めている。

最後に、第五回外遊（1887年）以降、張徳彝は清朝女性の自由解放については支持的な態度を堅持することとなった。男女間の親密な関係をかりそめではなく、愛の表現として理解することができるようになった。また西洋女性に対する張徳彝の受け入れ度はますます高くなっているが、清朝の権威に対抗する問題については、西洋人が参加した中国女性纏足解放運動の变革が清廷の権威に挑戦すると、伝統的な封建思想と政治的立場は張の限界となったことがわかった。結局、彼は封建清政府の擁護者になることを選んだ。

今後は、清末期に西洋で行われた教育を取り上げ、さらに考えを進めていきたい。当時の中国人の「西洋の学問」に対する反応を認識し、東西文明の衝突時の状況を理解することは、今日の教育にも一定の意義を持ち得ると考えるからである。

【注】

本文中に中国語文献を引用して付随する日本語翻訳はすべて筆者訳である。

【参考文献】

和文文献

- 岡本隆司（2008）『中国近代外交史の基礎的研究－19世紀後半期における出使日記の精査を中心として』文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書。
- 岡本隆司・箱田恵子・青山治世（2014）『出使時代の日記——清末の中国と外交』名古屋大學出版会。
- 関西中国女性史研究会（2005）『中国女性史入門——女たちの今と昔』人文書院。
- 黄紅萍（1997）「纏足についての研究」『東京家政大学生生活科学研究所研究報告』20, 25-35。
- 中国女性史研究会（2004）『中国女性の一〇〇年——史料にみる歩み』青木書店。

中国語文献

- 畢乃德（1993）『洋務学堂』杭州大学出版社。
- 斌 椿（2016）『乘槎筆記』商務印書館、中国旅游出版社。
- 陳梁芊（2016）「張徳彝与晚清外交」蘇州科技大学。
- （2018）「張徳彝与晚清外交改革」『蘇州科技大学学报』（社会科学版）第35卷02期, 74-78+93。
- 陳叔平（1998）『巴黎公社与中国』中国人民大学出版社。
- 董佳貝（2018）「霓裳 才媛 階層——晚清出使日記中的西方女性（1866－1895）」『安徽大学学报』（哲学社会科学版）第5期, 116-125。
- 高洪興（1995）『纏足史』上海文芸出版社。

- 高彦頤 (2009) 苗延威訳, 『纏足:「金蓮崇拜」盛極而衰の演変』鳳凰出版伝媒集団, 江蘇人民出版社.
- 耿明 (2014) 『張德彝思想研究——基于八部『述奇』的考察』[修士論文、安徽師範大学] (<https://kreader.cnki.net/Kreader/CatalogViewPage.aspx?dbCode=CMFD&filename=1015517777.nh&tablename=CMFD201501&compose=&first=1&uid=>).
- 宮百里 (1992) 「馮桂芬与『校邠廬抗議』」『文史雜誌』, 第4期, 5-7.
- 黃世俐 (2019) 『張德彝『航海述奇』研究』[修士論文、湖南大学] (<https://kreader.cnki.net/Kreader/CatalogViewPage.aspx?dbCode=CMFD&filename=1020603046.nh&tablename=CMFD202002&compose=&first=1&uid=>).
- 賴某深 (2019) 「賽金花、避孕套及其他——張德彝『五述奇』談趣」『書屋』第1期, 71-74.
- 李寧 (1988) 「意願・渴求・價值——從『再述奇』看張德彝对西方体育的介紹」『武漢体育学院学报』第4期, 94-97.
- 連正 (2022) 『清末外事訳員慣習研究——以張德彝为例』[修士論文、北京外国語大学] (<https://kreader.cnki.net/Kreader/CatalogViewPage.aspx?dbCode=CMFD&filename=1022028271.nh&tablename=CMFD202202&compose=&first=1&uid=>).
- 劉超・梁程宏 (2021) 「近代士人对西方世界的觀感探微——以清人張德彝八部『航海述奇』的女性觀察為視点」『寧波大学学报』(人文科学版) 第34卷第2期, 28-36.
- 劉英曼 (2014) 「『航海述奇』所見張德彝与中西戲曲交流」『戲劇文学』第7期, 114-118.
- 樓秀麗 (2008) 『張德彝: 一个清外交官西方認識的成長史』[修士論文、華東師範大学] (<https://kreader.cnki.net/Kreader/CatalogViewPage.aspx?dbCode=CMFD&filename=2008147297.nh&tablename=CMFD2008&compose=&first=1&uid=>).
- 阮元 (1980) 『十三經注疏』北京中華書局.
- 王韜 (1985) 『漫游随録』岳麓書社.
- 夏曉虹 (1995) 「清末的不纏足与女学堂」『中国文化』第1期, 219-229.
- (2004) 『晚清女性与近代中国』北京大学出版社.
- 薛曉涵 (2019) 「張德彝与『五述奇』中的使德故事」『参花(上)』第10期, 59.
- 尹德翔 (2009) 『東海西海之間——晚清使西日記中的文化觀察、認証与選択』北京大学出版社.
- 張生 (2004) 『晚清使臣与近代外交(1875-1911): 話語轉型与外交實踐』[修士論文、蘇州大学] (<https://kreader.cnki.net/Kreader/CatalogViewPage.aspx?dbCode=CMFD&filename=2004132509.nh&tablename=CMFD0506&compose=&first=1&uid=>).
- 張曉川 (2019) 「罵槐実指桑——張德彝『航海述奇』系列中的土耳其」『新史学』02期, 159-200.
- 張德彝 (1981) 『再述奇——欧美環游記——同治五年随蒲安臣志剛巡回出使欧美的見聞』湖南人民出版社.
- (1982) 『随使法国記(三述奇)』湖南人民出版社.
- (1986) 『随使英俄記(四述奇)』鐘叔河『走向世界叢書』岳麓書社.
- (1997) 『稿本航海述奇匯編』北京図書館出版社.
- (2016a) 『航海述奇』商務印書館、中国旅游出版社.
- (2016b) 『五述奇』鐘叔河『走向世界叢書』岳麓書社.
- (2016c) 『六述奇(附七述奇未成稿)』鐘叔河『走向世界叢書』岳麓書社.
- (2016d) 『八述奇』鐘叔河『走向世界叢書』岳麓書社.
- 張福清 (1996) 『女戒』中央民族大学出版社.
- 鐘叔河 (1985) 『走向世界: 近代中国知識分子考察西方的历史』岳麓書社出版.

(黄太華: 城西国際大学大学院人文科学研究科博士課程比較文化専攻在籍)

Abstracts

Images of Western Women in the Diaries of Envoys in the Late Qing Dynasty: Focusing on the Records of Zhang Deyi

Huang Taihua

After the Second Opium War, the Qing government was forced to open its borders and accept a new form of modern Western diplomacy. The Qing government dispatched envoys to the West to interact with contracting countries. Diplomats stationed abroad have written a large number of envoy diaries. Among them, Zhang Deyi (1847-1918) wrote the most travel records. I want to analyze whether his feudal ideology and the idea of men being superior to women was altered following changes to his status and social change resulting from his eight trips abroad. He was educated by Confucianism and was one of the few people and diplomats who had experienced western countries. This research starts with a series of books by Zhang Deyi titled “Sailing Narrative” or “Diary of a Chinese Diplomat”, and takes previous research as a perspective from which to investigate the depictions of Western women in the diaries of diplomats who went abroad in the late Qing Dynasty. Zhang Deyi was exposed to Western society and multiculturalism and made detailed records of Western women. The more he went abroad and the more he learned, he gradually began to change from being a stubborn conservative to an enlightened critic of women’s foot binding and other harmful practices.

Keywords: the late Qing Dynasty, western women, Zhang Deyi, envoy’s diaries, foot-binding